

物語

竹取物語

学習指導
のねらい

1 物語の展開をつかみとらせる。

物語単元の作品へと入っていくにあたり、基本的な場面設定を正しく踏まえた上で、場面の展開を丹念に押さえる習慣を身に付けさせたい。『竹取物語』のあらすじは、既に多くの生徒に知られたものであるが、短い原文のなかで繰り返し広げられる場面展開に意識を払い丁寧に読み取らせたい。

2 登場人物の性格や心の動きを読み取るようにする。

物語文においては登場人物の心情を細やかに読み取るようにしたい。そのためには、殊に古典の指導において注意を促したいのが、主語を始めた省略語句である。初心の段階にあつては、それらを丁寧に補いながら読み進めたい。また心情表現を主に担う形容詞、形容動詞についても古今異義語が多いので注意を要するところである。

3 最古の物語にふれ、物語世界に親しみをもたせる。

本教材は、わが国最古の作り物語である。既に昔話として親しまれているが、原文に当たれば新たな発見が多々、見いだされるであろう。その中には、古典に独特な世界観や風習が織り込まれている一方、現代の物語にも通ずる人間の心情が描かれているはずである。物語の口調に慣れさせるとともに、物語世界への興味関心を涵養していきたい。

4 基礎的な文法を知識として定着させる。

入門教材を経て得た基礎的な文法の知識を、本教材を通して定着させていきたい。助動詞、助詞については、数ある文法的意味の中から文脈に応じた用法を選択する力を養う。そのためには、生徒がみずから辞書や文法書を何度も引き、文法の体系を意識しながら個々の意味を読み取る習慣を身に付けさせたい。

学習指導の展開例

2 時間扱い

第 1 時	時 限
1 「竹取物語」の全体像を把握する。 2 第一段落、物語の序をおさえる。 3 第二段落、場面の展開をおさえる。 4 語義語法を明らかにし、内容を正しく訳出する。	目 標
展 開 1 ①「竹取物語」についての知識を述べ合う。 ②「竹取物語」について調べ、この作品がわが国最古の作り物語であることを確認し、平安朝の物語文学を概観する。 ③第一段落、第二段落を音読する。 ④物語の序における、基本的な場面設定を確認する。 2 ①冒頭部における物語の語り口調に着目させる。 ②翁の人物像をまとめる。 ③翁がみた姫の様子をまとめる。 ④翁が姫を子として育てる過程をまとめる。 3 ①翁の生活における変化をまとめる。 ②翁の生活が変化した要因をおさえる。 4 ①助動詞、助詞の用法はいくつかの文法的意味の中から文脈に応じた用法を選択する。 ②係り結びについての理解を確認する。 ③形容詞のウ音便についての理解を確認する。 ④敬語「おはす」「たまふ」についての理解を確認する。 ⑤「あやし」「うつくし」「ある」など古今異義語を確認する。	導 入 学 習 活 動
4 生徒が自ら辞書や文法書を使って、あらかじめ語法を確認しておくことが望ましい。①②④は教科書「古文を読むために」の各コラムや巻末の付録を用いてもよい。 3 ①②物語文の読解においては、場面の展開はもとより、それがどのような原因でもたらされたのか（「なぜ」）を問い、読み深めていきたい。 2 ①助動詞「けり」の解説を行う。 ②③④既知の内容、初めて知ることなどをおもしろさに気づかせる。 ③古文の学習における音読の重要性を体得させる。 1 ①全体のあらすじを確認してもよい。 ②平安朝の文学史を補助資料として作成、提示してもよい。	備 考

第2時		
4 語義語法を明らかにし、内容を正しく訳出する。	3 第五段落、場面の展開と登場人物の心理をおさえる。	2 第三段落、第四段落、場面の展開をおさえる。 1 前半（第一段落、第二段落）の復習をし、後半（第三段落、第五段落）の大意を把握する。
まとめ 4 ①助動詞、助詞の用法はいくつかの文法的意味の中から文脈に応じた用法を選択する。 ②係り結びについての理解を確認する。 ③「かたち」「きよらなり」「遊ぶ」「見る」など古今異義語を確認する。	3 ①男性達の心情が描かれた箇所を確認する。 ②男性達がなぜかくや姫を高く評価するのか、その要因をおさえる。 ③第七段が、本作品の求婚譚につながっていくことを教示する。 4 ①助動詞、助詞の用法はいくつかの文法的意味の中から文脈に応じた用法を選択する。 ②係り結びについての理解を確認する。 ③「かたち」「きよらなり」「遊ぶ」「見る」など古今異義語を確認する。	1 ①前半を音読した後、内容の要点を確認する。 ②後半を音読し、内容の大意を把握する。 2 ①姫の成長の様子と育てられ方をまとめる。 ②古代における成人の儀式について学ぶ。 ③姫のもつ超自然的な力について確認をする。 ④古代における名付けの儀式について学ぶ。 ⑤「学習のポイント」1・2に従い、場面の展開とかくや姫にみられる変化、および翁の生活にみられる変化を確認する。
4 生徒自らが辞書や文法書を使って、あらかじめ語法を確認しておくことを要する。	⑤時間に限りがある場合は、家庭学習の課題としてもよい。 3 ①②場面の展開はもとより、それがどのような原因でもたらされたのか（なぜ）を問い、読み深めていきたい。 ③第1時3②を参照させてもよい。 ②④適宜、図版などを用いてもよい。 ⑤時間を限りがある場合は、家庭学習の課題としてもよい。	1 古文の学習における音読の重要性を体得させる。 ①確認程度にとどめておく。 ②既知の内容、初めて知る内容などを尋ね、原文にあたることのおもしろさに気づかせる。 2 ①「うつくし」「きよらなり」など類義語の意味合いを辞書で確認させる。

観点別評価規準例

学習の目標	観点別評価規準例	評価方法
・『竹取物語』に始まる物語文学について理解を深める。 ・物語の設定や場面描写、登場人物の行動や心情を理解する。 ・古典文法の基礎を復習しながら定着させる。	関 教材に興味をもって意欲的に学習に取り組んでいる。 ・物語文学について理解し、興味・関心を高めている。 読 物語の基本的な設定について理解している。 ・本文の構成を把握し、内容を理解している。 ・翁の生活の変化を読み取り、各段落の関係と話の展開を理解している。 ・かぐや姫に関して述べられている超自然的な事柄を読み取り、『竹取物語』の伝奇的な性格を理解している。 知 重要古語や助動詞等に注意しながら本文に即して現代語訳している。 ・重要古語・主な助動詞について理解している。 ・敬語・係り結びについて基本的な事柄を理解している。 ・『竹取物語』の内容や文学史上の意義についての理解を深めている。	観察・自己評価 観察・自己評価 観察・ノート・定期考査 観察・ノート・定期考査 観察・ノート・定期考査 観察・ノート・定期考査 観察・ワークシート・定期考査 観察・ノート・定期考査 観察・ノート・定期考査 観察・ノート・定期考査

1 教材の研究

教材としての『竹取物語』

『竹取物語』は、わが国最古の作り物語である。内容は、かぐや姫の誕生と成長（第一部）、五人の貴公子と帝の求婚（第二部）、かぐや姫の昇天（第三部）、の三部から成る伝奇物語である。現代でも昔話として親しまれ、そのあらすじを知らない人はない。本教材として収録した「なよ竹のかぐや姫」は、『竹取物語』の冒頭として有名な部分である。かぐや姫の昇天の場面とともに、伝奇的性格がよくあらわれ、かぐや姫の特異性（普通の人とは異なっていること）を印象づける重要な一節となっている。また、文体も易しくわかりやすいものである。

昔話を読みあらすじを理解している生徒は、かぐや姫の特異な誕生、竹取の翁の家での養育、輝くような美女への成長などについて知っている。一方、翁の名前や発見時のかぐや姫の大きさと、異常な成長、かぐや姫の名前、命名者の名前など、原文を読んで初めて知ることも多いに違いない。原文を読んで昔話などと比較し、認識を新たに親しみを増し、古文に対する興味・関心を高めることができる格好の教材であろう。

内容的に易しく親しみのもてる教材ではあるが、原文を丁寧に読むという態度を涵養したい。具体的には、入門の単元で得た古

典の知識を定着させ、生徒自らの力で古文を正しく訳していくという態度であり、また、場面の展開や登場人物の心理を細やかにおさえていく態度などである。こうした態度は、今後、『竹取物語』よりもさらに複雑な構成をもつ物語文『源氏物語』などを読解する際に必要となるであろうから、現段階でしっかりと生徒の身につけておきたいものである。

なよ竹のかぐや姫

大意

昔、竹取の翁という者がいた。竹の中からかわいい女兒を見つけた、家に連れて帰って育て養育した。その後、翁はたびたび竹の中から黄金を得て富裕になる。幼女は異常な成長を遂げ美しい娘となつたので、「かぐや姫」という名をつけた。評判を聞いた男たちはなんとかして手に入れようと思つた。

構成

第一段落 (50・1～8) かぐや姫の発見

昔、竹取の翁という者が、竹の中から三寸くらいの女の子を見

つけ、家に連れて帰って妻に養わせた。

第二段落 (50・9～11) 翁の生活の変化

竹取の翁は、その後竹の中に黄金を見つけることが度重なつて、次第に裕福になつていった。

第三段落 (51・1～6) かぐや姫の成長

この幼女はみるみるうちに成長し、年頃の娘になつたので成人の式を行つた。たぐいまれな美しさで、家の中は明るく輝き、翁はこの子を見るときどんな時でも心が慰められた。

第四段落 (51・7～10) かぐや姫の命名

翁は勢力のある富豪となり、この娘の命名の儀式を行い「なよ竹のかぐや姫」という名をつけた。この名付けの儀式の間の三日間、大勢の男を集めて、盛大な「遊び」をした。

第五段落 (51・11～12) 男たちの反応

評判を聞いた男たちは、なんとかしてかぐや姫を手に入れようと思つた。

品詞分解

① **今** いま **は** 係助(提示) **昔** むかし **竹取の翁** たけとりのおきな **と** 格助(引用) **いふ** 動(ハ四・連体)

けり 動(過去・終止) **② 野山** のやま **に** 格助(場所) **まじり** 動(ラ四・連用) **て** 接助(單純) **竹** たけ **を** 格助(対象) **取り** 動(ラ四・連用)

つつ 接助(反復) **よろづ** の **こと** に **使ひ** つか **けり** 動(過去・終止) **③ 名** 名

を 格助(対象) **ば** 係助(提示) **さぬぎの造** さぬぎのみやう **と** 格助(引用) **なむ** 係助(強調) 係 **いひ** 動(ハ四・連用) **ける** 動(過去・連体) 係

現代語訳

① 昔々、竹取の翁という者がいたということだ。② 野や山に分け入って、竹を取っては、いろいろなことに使っていたそうだ。③ 名をさぬぎの造というのだった。④ その竹の中に、根もとの光る竹が一本あったのだった。⑤ 不思議に

④ その 格助(連体修飾) 名 竹の 中に、もと 光る 竹なむ 代名 格助(連体修飾) 名 格助(連体修飾) 名 格助(場所) 名 動(ラ四・連体) 名 係助(強調) 名	一筋 あり 動(ラ変・連用) 助動(過去・連体) 怪しがり て 寄り て 動(ラ変・連用) 助動(過去・連体) 動(ラ四・連用) 接助(単純) 接助(単純)	見る に、 筒の 中 光り たり。 動(マ上・一・連体) 接助(単純) 名 格助(連体修飾) 名 動(ラ四・連用) 助動(存続・終止) 代名	を 見 れ ば、 三寸 ばかり なる 人 いと 格助(対象) 動(マ上・一・已然) 接助(順接確定) 名 副助(程度) 助動(断定・連体) 名 副	うつくしう て る たり。 形(シク・連用(ウ音)) 接助(単純) 動(ワ上・一・連用) 助動(存続・終止)	⑦ 翁 言ふ やう、「われ 朝ごと 夕ごと に 見る 竹 名 動(ハ四・連体) 名 代名 名 格助(時間) 動(マ上・一・連体) 名	の 中 に おはする にて 知り ぬ。 子 格助(連体修飾) 名 格助(場所) 名 助動(サ変・連体) 格助(理由) 動(ラ四・連用) 助動(完了・終止) 名	に なり たまふ べき 人 な て、 家 へ 格助(結果) 動(ラ四・連用) 名 助動(当然・連体) 名 助動(断定・連体) 接助(単体) 格助(方向)	めり。」 とて、 手 に うち 入れ て、 家 へ 助動(推定・終止) 格助(引用) 名 格助(場所) 接頭 動(ラ下・二・連用) 接助(単純) 名 格助(方向)	持ち て 来 ぬ。 妻 の お に 動(タ四・連用) 接助(単純) 動(カ変・連用) 助動(完了・終止) 名 格助(連体修飾) 名 格助(対象)	預け て やしなは す。 うつくしき こと、 限りなし。 動(カ下・二・連用) 接助(単純) 動(ハ四・未然) 助動(使役・終止) 形(シク・連体) 名 形(ク・終止)	⑩ いと 幼 け れ ば、 籠 に 入 れ て やしなふ。 副 形(ク・已然) 接助(順接確定) 名 格助(対象) 動(ラ下・二・連用) 接助(単純) 動(ハ四・終止)	⑪ 竹取の翁 竹 を 取 る に、 この 子 を 名 格助(対象) 名 格助(対象) 動(ラ四・連体) 格助(時間) 代名 格助(連体修飾) 名 格助(対象)
--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	---	--

思つて近寄つて見ると、筒の中が光っている。⑥それを見ると、(背たけが) 三寸ほどの人が、たいそうかわいらしい様子で座っている。

⑦翁が言うことには、「わたしは毎朝毎晩見る竹の中にいらつしやるのでわかった。(わたしの) 子におなりになるはずの人であるようだ。」と言つて、手の中にそつと入れて、家へ持ってきた。⑧妻であるおばあさんに預けて育てさせる。⑨かわいらしいことはこの上がない。⑩たいそう幼いのでかごに入れて育てる。

⑪竹取の翁が竹を取るのに、こ

見つけ 動(力下二・連用)	て 接助(単純)	後 ^{のち} に 格助(時間)	竹 ^{たけ} 取る ^と 動(ラ四・連体)	に 格助(時間)	節 ^{ふし} を 格助(対象)
隔て 動(タ下二・連用)	て、 接助(単純)	よごと に、 格助(場所)	黄金 ^{こがね} ある 動(ラ変・連体)	竹 ^{たけ} を 格助(対象)	
見つくる 動(力下二・連体)	こと 重なり 動(ラ四・連用)	ぬ。 助動(完了・終止)	12 かくて、 接	翁 ^{おきな} やうやう 副	豊かに ^{ゆたかに} 形動(ナリ・連用)
なりゆく。 動(力四・終止)					
なりまさる。 動(ラ四・終止)	13 この 代名 格助(連体修飾)	児 ^こ やしなふ 動(ハ四・連体)	ほどに、 格助(時間)	すくすくと 副	大きに ^{おほきに} 形動(ナリ・連用)
なりまさる。 動(ラ四・終止)	14 三月 ^{みつぎ} 名 副助(程度)	ばかり に 格助(結果)	なる 動(ラ四・連体)	ほどに、 格助(時間)	よき 形(ク・連体)
ほどなる 助動(断定・連体)	人 ^{ひと} に 格助(結果)	なり 動(ラ四・連用)	ぬれ 助動(完了・已然)	ば、 接助(順接確定)	髪上げ ^{かみあ} 名
など 副助(婉曲)	とかくし 動(サ変・連用)	て 接助(単純)	髪 ^{かみ} 上げ 動(ガ下二・未然)	させ、 助動(使役・連用)	裳 ^も 名
着す。 動(サ下二・終止)	15 帳 ^{ちやう} 名 格助(連体修飾)	うち より 格助(起点)	も 係助(強調)	いだし 動(サ四・未然)	ず、 助動(打消・連用)
いつき 動(力四・連用)	16 この 代名 格助(連体修飾)	児 ^こ の 格助(連体修飾)	かたち の 格助(主格)	きよらなる 形動(ナリ・連体)	こと 世 ^よ 名
に 格助(場所)	なく、 形(ク・連用)	屋 ^や の 格助(連体修飾)	うち は 係助(提示)	暗 ^{くら} き 形(ク・連体)	所 ^{ところ} なく 名 形(ク・連用)
光 ^{ひかり} 満ち 動(タ四・連用)	たり。 助動(存続・終止)	17 翁 ^{おきな} 名 名	心地 ^{こころ} 悪 ^あ しく 形(シク・連用)	苦し ^{くる} し 形(シク・連体)	とき も、 係助(添加)

の子を見つけた後に竹を取る時には、(竹の)節と節との間に黄金の入っている竹を見つけることがたび重なった。12 こうして、翁はだんだん豊かになってゆく。

13 この幼子^{おきなこ}は、育てるうちに、すくすくと大きく成長していく。14 三か月ほどたつうちに、ちょうどよい背たけの人になったので、髪上げの儀式などあれこれと手配して、髪を上げさせ、裳を着せる。15 とばりの中から外へ出さずに、大切に育てる。

16 この子の容貌^{ようぼう}が気品があり美しいことは、世に例がなく、家の中は暗い所もなく光が満ちている。17 翁は、気分が悪く、苦しいときも、この子を見ると、苦しいこと

てしか
な
と、
音おと
に
格助(手段)
名
聞き
動(カ四・連用)
め
で
動(タ下二・連用)
て
感かんふ。
動(ハ四・終止)

もなくなってしまう。**18** 腹立たしいこともまぎれるのであった。

19 翁は（黄金の入った）竹を取ることが長く続いた。20（こうして）勢力の盛んな者になったのであった。21 この子が見たいそう大きくならしたので、名前を、御室戸斎部の秋田を呼んで、つけさせる。22 秋田は、なよ竹のかぐや姫とつけた。23 この名付けの儀式のあいだ三日間、声をはりあげて歌い踊る。24 いろいろな歌や踊りをしたのだった。25（男という）男は誰かれの区別なく呼び集めて、たいそう盛大に管弦の遊びをする。

語句の解説

50ページ

1 竹取の翁

本名ではなく世間の人の呼称である。竹組などで生計を立てていた老人であろう。

野山にまじりて

野や山に分け入って。「まじる」は、ここでは分け入るの意。

取りつつ

(繰り返し) 取っては。「つつ」は、動作の反復継続を表す接続助詞。

2 さぬきの造

「さぬき」は姓。「造」は、ここでは名。「みやつこまろ」の略。「さぬき」は、奈良県北葛城郡の地名「散吉」によったものか。「さかき」とある本も多い。「造」は本来、宮中や地方にて部族を統率する長だが、かくや姫の昇天の場面では、「みやつこまろ」と呼ばれているので、人名化している。

なむいひける

「なむ」は強調の係助詞。「結び」は連体形で結ばれる。「ぞ」よりも語勢がやわらかで会話文によく用いられる。「なむいける」は、伝承さ

4 三寸

約九センチメートル。「寸」は、
〔注1〕長さの単位。一寸は約三センチメートル。

うつくしうてゐたり

「うつくしうて」は、かわいらしい様子で。ウ音便。「ゐたり」は、座っている。「*うつくし」は「美しい」の意ではないことに注意する。「て」は形容詞の連用形を受けて、様子・状態を表す。「ゐる」は座るの意。

5 おはする

いらつしやる。「おはす」は「あり」の尊敬語。サ変動詞。以降、かくや姫に対して敬語が使われるのは、かくや姫の神性に対する畏敬の気持ちを表している。

知りぬ

わかった。「知りぬ」の内容はこの後の一文「子になりましたまふべき人なめり」をさす。

子になりましたまふべき

子におなりになるはずの。「子」は、〔注2〕「子」は、竹で作る「籠」(かご)を掛けたしやれ。私がいつも籠を作っている竹のなかにいたのだから、竹が籠になるように私の子になる、という意。『竹取物語』

発問例と解答例

50ページ

Q 「ありけり」の「けり」という助動詞

から、どのようなことがわかるか。

A 語り手が、人から伝え聞いた過去の出

来事を述べているということ。▼「けり」は間接的な過去を、「き」は直接的な過去を表す。

Q 「取りつつ」の「つつ」の意味を古語

辞典で調べなさい。

A ①ては、またて(反復) ②く続け

て(継続) ③くながら(並行) ④て(単純接続)。ここでは①の意。

Q 翁が見た姫の様子はどのようなだったか。

A 背丈が三寸ほどの人で、たいそうかわいらしい様子で座っていた。

Q 「うつくし」「ゐる」の意味を古語辞典

で調べなさい。

A うつくし：①かわいい。いとしい。②

きれいだ。美しい。③立派だ。見事だ。

ここでは①の意。▼平安時代には、小さいもののかわいいと見る意を表した。

ゐる：①(立つ)に対して)座る。②

には、この類のしやれが散見される
 「貝なし」と「甲斐なし」、「鉢を捨て
 つ」と「恥を捨て」など。「桃太郎」
 の話などと同じ「授かり子」伝説。
 「たまふ」は尊敬の補助動詞。

6 人なめり 人のようだ。「なめり」は
 「なるめり」が「なんめり」となり、
 その「ん」が表記されない形。「なん
 めり」は撥音便。「なる」は断定の助
 動詞「なり」の連体形。「めり」は推
 定の助動詞。ゝのようだ、ゝのように
 見える、の意。

妻の嫗 妻であるおばあさん。「嫗（お
 うな。おんな）」は老婆のこと。これ
 に対し若い女性には「をんな」である。
 「おきな」と「おうな」は、年老いた
 男女をさす言葉である。「おうな」は、
 「おみな↓おむな↓おうな」と変化した。
 この「おうな」の元の形「おみな
 な」と紛らわしい言葉に「をみな」が
 ある。こちらは、「をみな↓をうな↓
 をんな」と変化して、若い女の謂（い）から、
 女性一般をさすようになった。また
 「ひめ」に対する言葉には「ひこ」が
 ある。「め」が女性を、「こ」が男性を

表す言葉である。

7 籠 竹で編んだかこ。

9 よこと 節と節の間ごと。「よ」は、〈注
 3 竹の節と節との間。〉「こと」は、
 〳のたびにの意。節の間の空洞のどれ
 にもということで一本の竹全部にの意。

10 かくて 接続詞。話題を転ずるとき、文
 頭に用いる。こうして、それから、の
 意。

やうやう だんだんに。

▼ **51 ページ**

1 児 乳児。やや成長した幼児、子供につ
 いてもいう。

2 よきほどなる人 ちょうどよい背丈の人
 一人前の背丈の人。背丈が普通の大人
 と同じ程度になったことをいう。

髪上げ 〈注4 それまで垂らしていた童
 女の髪を、成人女性の髪型に結い上げ
 る儀式。一二、三歳頃に行う。〉男子
 の元服に当たる女子の成人式。

3 裳着す 裳（注5 袴）を重ねて腰の後ろ
 にまとう成人女性の正装。裳を初めて
 着ける女性の成人の儀式を「裳着」と
 いい、髪上げと同時に行う。↓「裳」
 は教科書巻頭図録9参照。を着せる。

ある場所に存在する。③住む。④位につ
 く。ここでは①の意。

★誰が何を「知りぬ」というのか。

▲ 翁が、娘が自分の子になるはずの人で
 あることを知った。▼「知りぬ」の後の
 文章に注意させる。

▲ なぜ「知りぬ」と思ったのか。

▲ 自分が毎朝毎晩見る竹の中に（娘が）
 いらっしやるのでそう思った。

▲ 翁は娘をどのように育てたか。

▲ 妻であるおばあさんに預けて、籠に入
 れて育てた。

▼ **51 ページ**

▲ 「よきほどなる人（ちょうどよい背丈
 の人）」とは、何にちょうどよいのか。

▲ 成人の儀式をするのにちょうどよい。

▲ 成人した娘の様子はどのように変わっ
 たか。

▲ その美しさは世間に例がないもので、
 娘がいる家の中は暗いところがなく光が
 満ちていた。

▲ 娘を得た翁はどうなったか。

▲ 豊かになり、勢力も盛んになった。

▲ 翁が「いきほひ、猛の者」になった理
 由は何か。

徳望のある人を選んで裳の腰ひもを結

んでもらう。髪上げと同時に行う女性の

成人の儀式。文法的には「裳・着す

（下二段動詞）」とも「裳着す」（サ変

動詞）ともとれるが、前文の「上げさ

せ」と応ずるものとみて、「裳・着す」

とりたい。「もぎす」と読まないこ

とを注意する。髪上げと裳着は、い

れも女子の成人のための儀式である。

髪上げは、それまでの髪型「うなゐは

なり」（肩をすぎるばかりに垂れ下げ

たもの）を改めて、髪を結い上げるこ

とを言う。髪は釵子かんざしや刺櫛さくしで飾り、後

ろで一つに結んでその末を垂れおく形

となる。また裳は、腰より下に、後ろ

の方にだけ蔽って後方から着けて二枚

重ねにするもので、いわば成人女子の

シンボルといつてよい。ただ古代社会

における成年式とは「結婚出来すよ」

と宣言することと同じであり、従つて、

この直後に翁が世の男たちを集めて酒

宴を催したりすることになるのである。

↓「裳」は、巻頭図録⑨参照。

帳

〈注6〉とばり。垂れぎぬ。〔室内の

布。〉

いっきやしなふ 大切に育てる。〔いっ

く〕は、大切にするの意。

4 かたち 顔かたち。容貌。現代語の「形」

とは異なる。

きよなること 気品があつて美しいこ

と。〔きよなる〕は、形容動詞「き

よらなり」の連体形。清浄な美しさを

いう。中古では第一級の美しさをいう。

世になく 世に比類がなく。またとなく

5 心地悪しく 気分が悪く。「悪し」は、

本質的に悪い意。「わろし」は、他と

比較して劣る。

7 いきほひ、猛の 勢力が盛んな。ここで

は富裕な、の意である。翁は経済力と

社会的権力の両者を得たと考えてもよ

いだろう。

8 御室戸齋部の秋田 〈注7〉〔「御室戸」

は、現在の京都府宇治市三室戸か。「齋

部」は、齋部氏。神事をつかさどる氏

族。「秋田」は、名。〉

9 なよ竹のかぐや姫 しなやかな竹のよう

に光り輝く姫。「なよ竹の」は、しな

やかな竹のような。姫が竹の中から出

生したことと、若々しい女らしさにち

A 「節を隔ててよごに、黄金ある竹を

見つけること重なり」、「竹を取ることに久

しく」なつたから。またかぐや姫を見れ

ば「心地悪しく、苦し」いことが直り、

気分良く過ごすことができたから。

Q どのような儀式があつたか。

A ①髪上げ ②裳着 ③名付け

Q 「よろづの遊びをぞしける。」の「ぞ」

がないと文末はどうなるか。

A 「よろづの遊びをしけり。」

Q 「いかでこのかぐや姫を得てしかな、

見てしかな」とは、①誰の心情か。②ど

のような理由によるものか。

A ①身分の貴賤なく、世間にいる多くの

男たちの心情。②かぐや姫がこの上なく

美しい女性であつたから。

なんでつけられた名称であろう。「か

ぐや姫」は、光りかがやくほどの美し

さから名付けた。「輝く」という語は

『類聚名義抄』などには「カカヤク」

と清音で記されているので、「かぐや

姫」とすべきだとの説もあるが、『古

事記』に垂仁天皇の妃で「迦具夜比売

命」という人もおり、やはり「かぐや

姫」とする通説に従うべきであろう。いわば普通名詞的なものであるが、それがいつのまにか本来の意味が忘れられ、固有名詞となったものであろう。平安時代も「彰子・定子」というような名がつけられていたことに留意させたい。

このほど 名付けの儀式のあいだ。

うちあげ遊ぶ 〈注8 声をあげ、楽器を鳴らして宴会をする。〉一説に、宴をする。手をうち鳴らし音楽をするなどの説がある。

10 うけきはす 〈注9 分け隔てせずに。〉

受け入れることを嫌わずに。誰かれの区別をせずに。

かしこく 盛大に。ここでは、程度のはなはだしいこと。

11 世界 広い世の中。世間。もともとは仏教語で、時間・空間全体の意。

貴なるも、賤しきも 身分の高い者も、

低い者も。「貴なり」は、高貴だ、上品だ、の意。身分が高いこと、身分の高い血筋にふさわしく上品であること。をいう。「賤し」は、身分が低い、の意。

いかで なんとかして。下に願望表現を伴う。

得てしかな 〈注10 妻にしたいものだ。〉

「てしかな」は、願望の意味を表す終助詞「てしか」に詠嘆の終助詞「な」が付いたもので、願望の意をいつそう詠嘆的に表す。

見てしかな 妻にしたい。「見る」は、

異性と関係をもつ、結婚する、妻とする、の意。

12 音に聞き 評判に聞き。うわさに聞き。

めでて感ふ 恋い慕って心を乱す。

鑑賞

『竹取物語』の発端の部分である。かぐや姫の昇天の場面とともに、その伝奇物語としての性格が最もよく表れているところである。昔話としてあらすじは理解しているであろうが、原文で読めばまた新鮮な印象を受け、認識をあらたにする点も多いに違いない。かぐや姫の特異な出生、輝くような美女への特異成長、竹取の翁の幸運な致富譚などが、この部分の物語の骨子となっている。いうまでもなく、このあとに五人の貴公子の求婚譚が続くが、かぐや姫という物語の主人公の超自然的な性格は、この部分に凝縮されているといつてよい。小さ子の発見は竹取の翁に幸運をまねき富をもたらした。また、特異な誕生でこの世に現れた小さ子

は、みるみる間に特異な成長をとげる。その特異な成長は、竹の子が春芽を出したかと思うと、どんどん成長していく自然現象に対する古代人の驚きの反映であろう。「髪上げ」「裳着」という成人式の行事も、現実の習俗の反映として注目される。

【脚問】の解説

50ページ

1 誰が何を「知りぬ」というのか。

【解答例】 翁が、姫が自分の子になるはずの人であることを知った。

【学習のポイント】の解説

1 かぐや姫の生い立ちと成長の様子を、本文に即して整理してみよう。

【解答例】

第一段落…異常生誕（もとと光る竹よりあたり）

この上ない美貌（うつくしきこと、限りなし）

第二段落…神秘的な力の具有（一）（この子を重なりぬ）

第三段落…異常成長（三月ばかりなりぬれば）

世に稀な美貌（この児の世になく）

神秘的な力の具有（二）（屋のうち慰みけり）

などが指摘されよう。

【解説】 物語の冒頭部分で語られる、かぐや姫のこの上ない美貌

や超自然的な力と神秘性は、この『竹取物語』が難題求婚譚であると同時に翁の致富譚でもあるという物語の展開を予想させる大切な要素である。

「二三」（神聖数字といわれる）という数字の多用、かぐや姫への尊敬語から、古代の人々の超自然的なものへの畏敬と憧憬の表れが読み取れる点、この小公子が神の申し子である点もできれば取り上げたい。

2 かぐや姫が翁の子になってから、翁の生活はどのように変わったか。それがわかる三つの段落の要点を、それぞれまとめてみよう。

【解答例】

第二段落…黄金の入っている竹を見つけることが度重なり、だん

だん豊かになっていった。

第三段落…気分が悪く、苦しいときも、かぐや姫を見ると、苦し

いこともなくなり、腹の立つこともまぎれた。

第四段落…竹を取ることが長く続いて、金持ちの勢力家になった。

【解説】 神の申し子であるかぐや姫を授かってから、翁の生活は一変する。単に裕福になったというだけでなく、心情の面でも安定し、かぐや姫によって悩みや苦しみが癒され慰められたことに

注意したい。

2 研究資料

出典

教科書の本文は、『新編日本古典文学全集12』一片桐洋一校注・訳 一九九四 小学館) によった。同書は、江戸時代以降の流布本の祖ともいわれる古活字十行甲本を底本としている。

『成立』『源氏物語』絵合の巻に「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁」と記され、平安時代に最古の物語と称された『竹取物語』の成立について明確な成立年時を示す記録はないが、以下のような種々の徴証から、九世紀末頃より十世紀初頭にかけての成立と考えるべきであろう。

- ・『源氏物語』絵合の巻の記事によれば、『竹取物語絵巻』の詞が紀貫之(九四五年頃没)によって書かれている。
- ・物語の中で大伴の大納言を難題に失敗した人物として嘲笑的に取り扱っているが、応天門の変で大伴氏が権力を失墜したのは貞観八年(八六六)以後である。
- ・同じ大納言の話のところに「蒔絵」が出てくるが、「蒔絵」の流行は延喜年間(九〇一―九二二)である。
- ・かぐや姫昇天の場面に頭中将が出てくるが、これは蔵人所の置かれた弘仁元年(八一〇)以後である。
- ・和歌の修辞からみて、『竹取物語』の和歌はどんなに早くても

九世紀末頃の作ではないかと思われる。

『内容』『竹取物語』は大別して三部から構成されている。すなわち、(1)かぐや姫の出生、(2)五人の貴公子の求婚、(3)帝の求婚とかぐや姫の昇天、である。『竹取物語』はその骨格として、民話や昔話の要素を多くもっている。特異な出生をした小さ子が、特異な力をもつという話は、桃太郎や瓜子姫の話でよく知られるように、「小さ子」説話と称される民話の一つの型である。第一部のかぐや姫の出生は、この型の民話と共通する要素が多い。第三部は、「帝の御狩の行幸(求婚)」「かぐや姫の昇天」「後日譚」の三つに分けられる。「後日譚」に当たる部分は、不尽の山の地名の起こりを説く地名起源説話でもあるが、中心をなすかぐや姫の昇天の話は、羽衣伝説で知られる「天人女房」の説話で、日本のみならず世界各国に行われている民話と同趣である。第二部の五人の貴公子による求婚譚は、これも「難題譚」と呼ばれる民話として世界的に分布している。このように、『竹取物語』が民話的要素を骨組みとして成り立っていることは間違いない。ただ、それが日本古来の伝承によるものか、中国から渡来した仏典や漢籍の直接の影響によるものかは議論の分かれるところであろう。恐らくそのどちらか一方にのみ帰することは誤りであろう。しかも、『竹取物語』の成立で最も重要な点は、この物語が既成の伝承や

文献のみによって作られたものではないということである。それらをふまえて、作者が明確な意識をもって創作した文学作品であるということである。ここに単なる伝承の記録ではなく、創作された物語としての『竹取物語』の価値が存する。

『竹取物語』と類似の説話は、日本の古典の中にもいくつか散見する。『万葉集』巻十六（有_ニ由縁_ニ雑歌_ニ）に「竹取翁偶逢_ニ九箇神女_ニ」^{「贖_ニ近_ニ狎_ニ之罪_ニ」}「作歌」があり、『今昔物語集』巻三十一第三十三話に「竹取翁見_ニ付女兒_ニ」^{「養語」}があるが、前者は内容において大きく相違し、後者も、求婚者が三人で、難題も「空_ニ鳴ル雷_ニ」「優曇花の花」「打タヌ_ニ鳴ル鼓_ニ」と「竹取物語」とは異なる。「古今集註」（藤原為家、『海道記』、『三国伝記』など）に見えるのは「鶯姫」型の説話で、『竹取物語』や『今昔物語集』とは別系統の話である。

仏典や漢籍との関係も、古来多くの研究者によって指摘されてきた。広大宝楼閣経（僧契沖）、『奈女祇域因縁経』（田中大秀）、『月上女経』（幸田露伴）などの仏典、『後漢書』（田中大秀・西村真次）、『漢武内伝』（藤岡作太郎）などの漢籍の影響が説かれているが、直接的関係を断定できるものはない。用語文体などから、『竹取物語』の背後に漢文体の原作を考える説も有力であり、成立後に後人の筆が加わったと見る学者も多い。

この物語の評価は、『源氏物語』に記されている「物語の出で来はじめの親」という一文に尽きるであろう。作者の創作意識によって生まれた、最初の「作り物語」である。『宇津保物語』『源氏物語』など後出の物語の成立に与えた影響は今さういうまでもないであろう。モデルが存在したとはいえ、五人の貴公子をそれ

ぞれ個性をもつ人物として形象化し、無限の天上世界と対比して人間世界の苦悩や悲しみを描き出している点は評価されなければならない。

〔伝本〕 現存する伝本は、すべて室町期以後のものである。古本系と流布本系に大別される。古本系の最古のものは、伝後光厳院宸筆の九行ほどの断簡で、室町期を下らぬ書写と推定される。流布本系統のものは、天正二〇年（一五九二）書写の天理図書館蔵本（武藤元臣旧蔵本）が最も古く、これは定本として最古の写本である。

作者

用語や文体から、男性の手になる作品と推定されるが、作者未詳である。源順、源融、僧正遍昭（良峯宗貞）、紀長谷雄などの諸説があるが、確証はない。

■教材研究・授業研究のために

『竹取物語・伊勢物語 大和物語』（日本古典文学大系）

阪倉篤義他 岩波書店 一九七〇

『竹取物語・伊勢物語』（日本古典全書） 南波浩

朝日新聞社 一九六〇

『竹取物語・伊勢物語 大和物語・平中物語』

片桐洋一他 小学館 一九七二

『かぐや姫の誕生』（講談社現代新書） 伊藤清司

講談社 一九七三

『竹取物語・宇津保物語』（鑑賞日本古典文学6） 三谷栄一編

角川書店 一九七五

『竹取物語』（新潮日本古典集成） 野口元大

新潮社 一九七九

『竹取物語・伊勢物語 大和物語・平中物語』

片桐洋一他 小学館 一九九四

『竹取物語・伊勢物語 大和物語』（新日本古典文学大系）

堀内秀晃他 岩波書店 一九九七

『竹取物語 伊勢物語必携』 鈴木日出男編

学燈社 一九九八

『竹取物語 大和物語 宇津保物語』（新潮古典文学アルバム3）

藤井貞和編 大岡信文 新潮社 一九九二

『研究講座 竹取物語の視界』 王朝物語研究会編

新典社 一九九八

『竹取物語 伊勢物語』(週刊朝日百科世界の文学26)

河添房江編 朝日新聞社 二〇〇〇

『竹取物語の研究―達成と変容』 奥津春雄 翰林書房 二〇〇〇

■読書指導・発展学習のために

『竹取物語』(角川文庫ソフィア4) 中河與一訳註

角川書店 一九八六

『竹取物語』(学燈文庫) 山岸徳平著

学燈社 一九八六

『竹取物語』(講談社学術文庫) 上坂信男訳注

講談社 一九八六

『竹取物語』(角川文庫) 星新一訳

角川書店 一九八七

『竹取物語 伊勢物語』(集英社文庫) 田辺聖子著

集英社 一九八七

『竹取物語』(コミックストーリーわたしたちの古典)

長谷川孝士監 学校図書 一九九一

『竹取物語 伊勢物語 堤中納言物語』(ちくま文庫)

白井吉見他訳 筑摩書房 一九九二

『竹取物語(全)』―ミニ・クラシックス2これだけは読みたい日本

の古典―(ミニ文庫) 角川書店編 角川書店 一九九二